

【特集】

## IAML / IMS ニューヨーク大会 デジタル時代の音楽研究

June 21 - 26, 2015

特集・2015 IAML / IMS Congress, New York City  
<Music Research in the Digital Age>

IAML / IMS NYC 2015「デジタル時代の音楽研究」 に参加して	荒川恒子 1
デジタル時代の音楽研究 - IAML / IMS ニューヨーク 大会 2015	樋口隆一 4
IAML ニューヨーク国際大会 2015 - RILM 創設 50年	関根敏子 7
IAML / IMS 2015 New York で思ったこと	藤堂雍子 9
事務局日より	12

### IAML / IMS NYC 2015 「デジタル時代の音楽研究」 に参加して

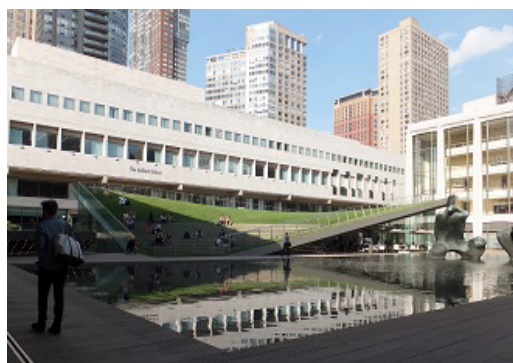
支部長 荒川恒子

会長バーバラ・マッケンジーさんは、国際音楽学会との提携で行われる大会は、今までにも経験済みであったが、従来は同一日程に、同一会場を使用しただけで、両協会のメンバーの関心事も行動も別々で、交流という意味ではあまり噛みあわなかったこと、しかし今回は両団体メンバーが互いに必要不可欠な存在、関係にあることを、認識しあった会となったとの感想をもって閉会式の辞となさいました。まさに同感でした。音楽学者として

IAML のメンバーであることに、絶えず違和感を持ち、メンバーとしての役割を模索していた私が、のびのびできた初めての会でした。

「デジタル時代」となり、図書館やドキュメンテーション・センター等の仕事の方法や内容は、当然のことながら大きく変わりました。そしてまた若い音楽学専攻の学生の関心事、将来の仕事の可能性等に対する意識にも大きな変化がみられます。図書館関係の人々と音楽学を専攻とする人達は、日頃から協力しあって、資料のデジタル化に向けて仕事をするようになってきたことを、様々な発表から聞きとることができました。その際は両者が共に意識改革をし、新しいスキルの開発に熱心に取り組む必要があります。その結果、歴史研究を続けている私のような者にも、多くの刺激と利益が与えられています。今の時代に生きることは、まさに幸運の一言に尽きます。

さて会場であるジュリアード音楽院に入ってみ



ジュリアード音楽院

ずびっくりしたことは、非常に多くの参加者、それも初めての参加者に会えたことです。45ヶ国ほどから 2000 人以上との数字が挙がっています。準備段階で、いわゆる日本名の方の発表が多いと感じていました。他国に留学しておられる方、移住された日系人等、その名前、姿からルーツをアジアに持つ人々が、かなりこの世界で仕事をしておられることに、気付かされました。さらに今回はアジアの若い方が、奨学金を与えられて出席なさいました。彼等が支部を持たない国から来られた場合、その地の代表として支部代表者会議への参加も促されました。いつになく多くの出席をみた代表者会議で、私の隣に座られたのはインドの若い女性でした。発表者として初めてこの大会に参加されたとのこと。この会議でのディスカッションの中心は、デンマーク代表からの訴えでした。彼女によると、北欧とバルト三国の集会において、「IAML」メンバーである必要性を感じられない、または分からない」との意見が多かれ、対処に困難を極めているとのことでした。これらの国においても、当然ながら大規模なリサーチ図書館で働き、国際大会に参加できるメンバーはほんのわずかです。また誰もが英仏独で書かれる配布書類を読める訳ではない、といった日本の事情を聞いているような話題もいただきました。事実 IAML の活動に熱心なメンバーが退職すると、その支部が衰退の一途を辿るのを、どのようにしたら食い止められるのか、各国の事情や対処の仕方に関して、お問い合わせがありました。生涯に一度も国際大会に参加することのない方、この協会の難しい組織構造の故に、積極的に活動する一歩が見いだせないメンバーに対し、各支部がそれぞれの状況に合わせて、助力や工夫をすることを求められました。ちなみに本部の努力が実り、昨年度はブラジルと韓国に支部が設立されました。

次に文化プログラムという、とても楽しい企画に関してお知らせしましょう。例年通りにコンサ-



全体会議「デジタル時代の音楽研究」

ト、ニューヨークの美術、博物館見学、フェアウェルパーティ等がありました。その中でも特筆すべきは、RILM 設立 50 周年を祝い、RILM, RIPM, RISM, RiDIM がスポンサーとなって、ハドソン河のクルージングが行われたことです。ニューヨーク・サンドウィッチと飲み放題のドリンクを手に、マンハッタンの主要建造物の説明を受け、夕闇の中で「自由の女神」を見て、アメリカ滞在を実感しました。またジュリアードは、ホール、劇場、様々な音響、映像を保存・公開する施設が隣りあわせに並ぶという、素晴らしい立地条件のもとに、リンカーン・センターに移転しました。そこでメトロポリタン・オペラのリハーサルを覗いたり、ブロードウェイやセントラル・パークの散歩なども含めて、充実した一週間のニューヨーク・ライフを過ごすことができ、ニューヨーク大好き人間となって帰国しました。

発表に関してですが、特別企画は、木曜日の夕方に行われた「Barry S. Brook: A Tribute」です。ブルックさんの学問的業績、RILM, RIPM 立ち上げへの貢献、大学での教育者としての姿、そしてまた私生活について等、彼の親しい友人、知人達がフランクな雰囲気でお話されました。さらに昨年を引き続いて「グローバルな時代」を意識してか、国別のトピックが設けられたのも特色かもしれません。アメリカ合衆国、スベ

イン、ブラジル、東アジア、イタリア、ポーランド・エストニア・ロシアといった具合です。

さて発表内容をいくつか御紹介いたしましょう。筆者の研究に直接関係するものとして、西欧の国々が所有する大型楽譜コレクションのデジタル化があります。まずドイツの Paderborn と Detmold 大学音楽学研究所で、2014年に始まったプロジェクトです。デトモルト宮廷所有であった楽譜のデジタル・カタログ作成が、図書館と協力しあって MEI (Music Encoding Initiative), TEI (Text Encoding Initiative) を使用して行なわれているのです。MEI, TEI を使用するプロジェクトは、すでにデンマーク、ベルリン、ロンドン、モンテリオール等で行われ、成功していることをヴァージニア大学図書館ホームページから知ることができました。特にルネサンス音楽研究と情報処理学の分野で活躍なさる藤永一郎さん(モンテリオールのマギル大学准教授)は、今回のような総合タイトルの大会には最適な人物です。ルネサンス研究部門で、「初期ルネサンス音楽のデジタル分析と研究—ジョスカン研究プロジェクト」と題する発表、また MEI 部門で「15 歳になった MEI — 反省、挑戦、機会」と題する発表をなさいました。なお MEI を使用するプロジェクト構成メンバーには音楽学研究所、図書館、技術者の協力が欠かせません。州立ザクセン図書館、フランス国立図書館のデジタル・コレクションに関する発表でも、三者協力の状況に言及されました。またスウェーデンのウプサラ大学図書館所有のメガ・コレクション、デューベン・コレクションに関して、「データベース・カタログの 25 年—新しい機会、手段、展望」と題する発表も興味深いものがあります。この構想の始まりは 1987 年に遡り、1990 年代初頭に実務が始まり、2006 年にインターネット上で公開されたのです。Düben Collection Database Catalogue (DCDC) と検索をかけると、ウプサラ大学図書館に繋がり、この作業の過程を知ることができ

ます。これは Erik Kjellberg と Kerala Snyder の提案により、ウプサラ大学音楽研究所とアメリカのロチェスター大学イーストマン音楽学校の共同作業として、まず 1988 年にロチェスター大学で作業が始められ、1991 年より本拠をウプサラ大学に置くことになりました。初期の段階ではスナイダー教授のパソコン上でデータベースが作成されましたが、後にヨーテボリのオルガン研究所のコンピュータを使用できるようになったそうです。しかし遅々として進まない作業に、ウプサラとロチェスターの学生がヴォランティアとして助力することになったそうです。彼等にデータベース・カタログの作成作業を学ぶ機会を与えると共に、国際事業に協力する喜びを味わせるためでした。当時携わった学生の中に、今アメリカの 17 世紀音楽学会を牽引するメアリー・フレンドセン女史もおられます。

もうひとつ、全く別の角度からの興味深い発表がありました。支部代表者会議で私と隣合わせに座ったインドの若い方のもので、インドの国際情報技術研究所の所員である彼女の論題は、「ヒンドウスターニの伝統音楽を学び、制御し、研究するヴァーチャル・ラボ」というものでした。師の演奏を聴きながら模倣すると、それが一種の波形として示され、師と弟子の演奏の違いを視覚的に示し、演奏を修正できるという道具が開発されているのです。この会場の聴衆の多くは、学生時代に五線紙には書き記せない異国の音楽の、さわりの部分を学んだ経験を持っていました。そこで彼女の説明、構想には大きな共感が示されました。「五線紙では記譜できない自国の文化をきちんと知ってもらおう努力は、自分達で始めなければと思うの」、という彼女の言葉には重みがありました。デジタル化が当然となった今だからこそ始められる、日本文化の保存、伝承、伝達等に関して、為すべきこと、または為せることは大きいと、ヒントをもらいました。(あらかわつねこ)

## デジタル時代の音楽研究

IAML / IMS ニューヨーク大会 2015

樋口 隆一

(国際音楽学会 IMS 副会長)

国際音楽資料情報協会 IAML と国際音楽学会 IMS の合同大会が、2015 年 6 月 21 日 (日) ~ 26 日 (金) の 6 日間、ニューヨークのジュリアード音楽院を会場に開催された。

私にとっては 2 度目のニューヨーク訪問であったが、初めて行ったのは 1978 年のことだったから、今回はじつに 37 年ぶり。すっかりお上りさん気分であった。前回は、『新バッハ全集』の校訂のためのカンタータの自筆譜の調査で公共図書館 Public Library の音楽部門や、著名な蒐集家のルドルフ・カリールを訪問するためにドイツから大西洋を渡って行ったのだが、今回は東京から、それもトロント経由での長旅であった。

今回の大会は IAML と IMS の合同大会であり、特に IMS としてはもう 1 人の副会長であるマレーナ Malena Kuss がニューヨーク在住ということもあって、IAML との連携に努力を惜しまなかった。また国際音楽文献目録 RILM の創立 50 周年記念大会でもあり、その RILM の事務局長を長らく務め、つきあひも長いバーバラ Barbara Dobbs Mackenzie が、IAML 会長として開催する大会であるということも加わって、私にとってとりわけ意味深い大会となった。

ジュリアード音楽院は、あのメトロポリタン・オペラもあるリンカーン・センターの一角にあるため、いつでも呼び出せるようにと、近くのエンパイア・ホテルに泊まらせられたが、幸いにしてそうした非常呼び出しがかかるとはなかった。

私自身のメイン・イベントは初日 21 日 (日) の朝 9 時から午後にかけての IMS の理事会 Directorium であった。これは会長と副会長 2 名、事務局長によって構成される執行部 Bureau と各国代表理事による会議で、IMS に関するあらゆる議案が討議されるが、特に今回は 2017 年 3 月の東京大会のためのプログラム委員会の構成を巡っての議論があり、非常に重要な会議だった。ともかく欧米人は、いかなることでも滔々と論じる人が多いので、なかなかエネルギーのいるものなのである。

夜は、音楽院のホールのロビーを使つてのオープニング・レセプションだった。荒川先生、藤堂さん、関根さんと会えたので、レセプションは早々に切り上げ、最初の日本人会となった。

22 日 (月) は朝 8 時 45 分からオープニング・セッションが始まった。”Digitizing musical New York” という題名が示すとおり、カーネギーホールやニューヨーク・フィルの資料のデジタル化に関するレポートであった。

それが終わると、すぐに地下鉄に乗って RILM の本部に向かった。長らく日本国内委員会の委員長を務めさせていただいたので、事務局長の関根敏子さんと 2 人で本部の見学と昼食に招待されていたのである。本部があるニューヨーク市立大学研究センターは、なんとあのエンパイアステート・ビルの斜向かいにあるのでわかりやすい。受付に行くと、折良く関根さんも到着していて、一緒にすばらしい図書館や本部を見学させていただき、近くのモロッコ料理のレストランで、珍しいタジン料理をご馳走になった。編集長のブラゼコヴィッチ Zdravko Blažeković さん、アジア関係の主任をしているブルーム David Bloom さんと、親しくお話しできたのはじつに有益だった。食後は、市立大学の博士課程の学生で RILM のアルバイトもしているという藤沢佳恵さんの案内で、公共図書館やモーガン・ライブラリー Morgan Library &



Museum、オクスフォード大学出版局などを案内していただいた。特にモーガン・ライブラリーは、バッハやモーツァルトの自筆譜で有名なので、休館日ではあったが、少なくともここにあるということがわかっただけでも嬉しかった。

夕方になるとタクシーで栈橋に急いだ。RILM 創立 50 周年記念のクルージング・パーティーが予定されていたのである。夜の 7 時から 10 時までの 3 時間、マンハッタンを 3 回くらい回りながら美しい夜景を楽しんだ。自由の女神も壮観だった。バーバラが若々しいピンクのワンピース姿で現れ、御主人を紹介してくれた。とても素敵なお人で、この御主人の理解があればこそ、バーバラが立派な仕事を続けられるのだと思った。

しだいに夜の帳が下りると、マンハッタンの夜景が私たちの目を奪った。あのグラウンド・ゼロにも新しいビルが建ち、新しいマンハッタンの景色を形作っている。自由の女神もライトアップされると、昼間とはひと味違った美しさを見せてくれる。

23 日（火）は朝 9 時から、IMS 事務局長のドロテア Dorothea Baumann が司会する "Soundscapes" というセッションに参加した。ソルボンヌ大学音楽学部長の Frédéric Billet と助手の Xavier Fresquet による "Musiconis: Visualizing and indexing the medieval soundscape" は、中世音楽が生まれた「音の風景」を可視化しようという興味深い試み。ブルゴーニュ大学の Vasco Zara による "3D for ancient music and new pedagogy" も同様の趣旨だ。イェール大学の Anna Zayaruznaya とロンドン大学の Rebecca Fiebrink による "The Roman de Fauvel as synthetic digital object" は、有名な『フォーヴル物語』の写本のデジタル画像のあちこちをクリックすると、それに関する解題や音が出てくるというソフトの紹介。

12 時 30 分からは、RIPM 主催による "Lunch



セッション "East Asia" 発表者と筆者(右から 3 人目)

and presentation”。編集長のロバート・コーエン Robert Cohen らが、ウィキペディアとの協力や、RIPM e-Library に加えられた 65 の音楽雑誌についてのプレゼンテーションを行ってくれた。14 時からは、RILM50 周年を祝うセッションで、長年にわたるバーバラたちの努力に、満場の喝采が送られた。

夜にはジュリアード音楽院の学生たちを中心としたコンサート。音楽院が所蔵するコレクションに的を絞ったプログラムが興味深かった。終了後、音楽院の図書館でのパーティーに参加した。

24 日（水）は忙しい 1 日となった。9 時からの Plenary session “Music research in the digital age” に出たあと、11 時から自分が司会するセッション “East Asia” があったからである。発表者は台湾と上海のみで、日本と韓国からの発表がなかったのはなんとも残念である。冒頭は台湾大学講師 Pei-jun Wu による “A future of information in Taiwan: The challenge of integrating resources on academic music”。彼女は台湾に於ける RILM の活動を活性化しているが、財源が乏しく苦勞しているとのことだった。日本の RILM 国内委員会事務局長関根敏子さんからも、同様の問題を抱えているとの発言があった。

もうひとつの発表は、上海音楽院教授の Yan Di Yang と台湾大学准教授の Chun Zen Huang の合同発表で “Collaborative project on Chinese music resources: Collecting composers’

manuscripts, preservation, and research”、つまり台湾と上海が協力して、中国の音楽資料の収集と研究を始めたという歓迎すべき内容であった。私から「RISM 委員会の立ち上げは考えないのか」と質問したところ、それも視野に入れているという答えであった。その後のニュースとしては、昨年 10 月に台湾から、中国語圏の RISM-Working Group として RISM-Chinese Language Region が発足したことが伝えられた。北京中央音楽院図書館、国立台湾大学のデジタル音楽アーカイヴ、上海音楽院図書館、台湾国立伝統音楽センター台湾音楽研究所がメンバーとして加入している。

14 時から、いくつかのグループに分かれて Excursions が行われた。私は「ニューヨークのドヴォルザーク」というグループに加わったのだが、猛暑の中の町歩きで、ほとんど熱中症になってしまった。とはいえ、小さな公園の片隅に佇むドヴォルザークの銅像や、チェコ文化センターともいべき Bohemian National Hall にあるドヴォルザーク記念室を知ることができたのは大きな収穫でもあった。

25 日（木）は朝 9 時からの RISM のセッションに参加した。事務局長のカイル氏 Klaus Keil とは、2006 年にフランクフルトの本部を訪問して以来、親しい関係にある。会長はバッハ学者のクリストフ・ヴォルフ Christoph Wolff から、ヘンレ出版社のザイフェルト社長 Wolf-Dieter Seiffert に変わったが、彼とも非常に親しいので、久しぶりの再会を喜び合った。「7 月にはテオドル・ベルヒェム賞の授賞式があるのでドイツに行くよ」と言ったところ、「ぜひミュンヘンのヘンレ出版社に立ち寄ってくれ」ということになった。実際にこの約束を果たしたところ、ヘンレ出版社の Facebook に、受賞を祝うザイフェルト社長と二人の写真が掲載されてしまった。これが私の Facebook デビューとなったわけだが、登録するとすぐにロサン

ゼルスに住むシェーンベルクの息子さん Lary Schoenberg から友達申請があった。「デジタル時代の音楽研究」は、このように思いもかけぬ発展をはらんでいる。

RISM セッションの大きな成果は、当初 1600 年から 1800 年を意図して始められたデータベース A/II Music Manuscripts after 1600 の対象が、正式に現代まで広げられることになったことである。現実にはすでに、欧米の主要図書館は、19 世紀や 20 世紀の音楽資料データを多量に RISM 本部に送っているが、それが追認され、いよいよ世界の音楽資料の総合的なデータベース化が加速することとなった。19 世紀末に西洋音楽を導入し、現在では世界屈指の音楽大国となった日本の役割が、RISM の中でも問われる時代が始まったのである。

11 時から RIdIM、つまり音楽イコノグラフィーのセッションに参加した。会長のアントニオ Antonio Baldassare はルツェルン音楽大学教授で IMS のスイス代表理事でもある。ここでも、ダンスや演劇など、音楽に関係する諸領域への拡大がテーマとなっていた。これもデジタル時代のひとつの利点だろう。

16 時から RILM の創立者として知られるブルック教授を記念する “Barry S. Brook: A tribute” に参加した。ニューヨーク市立大学の後継者であるアラン・アトラス Allan Atlas の司会で、RILM の後継者となったバーバラ、RIPM を育てたロバート・コーエン、さらにフランスの交響曲研究の礎を築いたブルックについて、カトリーヌ Chathrine Massip が語り、ブルック教授の功績を称えた。

26 日（金）は最終日、朝 9 時からのイコノグラフィーのセッションに出たあと、熱中症の影響もあり、午後はホテルで休養し、夜の Farewell dinner にはなんとか顔を出すことができた。あらゆる意味でニューヨークのエネルギーを実感した大会であった。（ひぐちりゅういち）

## IAML ニューヨーク国際大会 2015 ～ RILM 創設 50 周年～

関根 敏子

(RILM 日本支部・音楽文献目録委員会事務局長)

2015 年は、RILM プロジェクトの 50 年周年。そのため RILM 国際本部による記念イベントもあるということで、IAML / IMS ニューヨーク国際大会に参加した。2008 年のナポリ国際会議から実に 7 年ぶりになる。

アメリカは、2002 年の IAML パークレー国際会議以来で 2 度目、ニューヨークは初めて、しかも英語の国ということで少し緊張して出かけた（いつもはヨーロッパ、それもフランスが中心なので、フランス語が通じる安心感があった）。飛行機も日本の航空会社にし、時差も考慮して 3 日ほど前に到着。

今年は IAML と IMS の共催で、多数のセッションのどれに出席するか迷うほど。以下、RILM 関連のものを中心に報告する。

6 月 21 日（日）。午後に会議登録などをすませ、夜のレセプションへ。宿舎は、会議場のジュリアード音楽院にある寮へ申し込んだのだが、オーバーブッキングが発生し、近くの大学寮に移ってほしいというメールが突然に来て驚いた。場所は、広場を横切るだけでよく、すぐそばだからと説得されたのだが、その広場とはリンカーン・センターと呼ばれる場所で、メトロポリタン歌劇場やミュージカル・シアターなどがあり、不安はまったく杞憂であった。

6 月 22 日（月）。RILM 国際本部訪問と RILM 創設 50 周年記念のクルーズ（レセプション）。せっかくニューヨークに行くのだから RILM 国際本部を訪問したいと出発前に連絡したところ、ランチミーティングをという嬉しい返事をいただいた。場所は、マンハッタン地区、

エンパイアステート・ビルディングのすぐそばにある。

RILM 国際本部のある建物は、20 世紀初頭に建設されたデパートがあったところで、現在は市立図書館と市立大学大学院センター（CUNY Graduate Center）が入っている。アンティーク風の優雅な装飾が残るエレベータや階段の手すりなど近代的な図書館。当日は、国際本部事務局でアジア関係を手伝っている藤沢佳恵さん（現在プッチーニに関する博士論文を執筆中）が、樋口隆一先生（前音楽文献目録委員会委員長）と筆者（事務局長）を案内してくださった。市立図書館から学生食堂、そして RILM の事務局へ。編集作業用の小さな部屋がいくつかあって PC が並んでいる。

最後に『RILM Abstracts』（国際音楽文献目録）の編集責任者や各地区担当者などがある部屋を訪問。編集長のマッケンジー Barbara Dobbs Mackenzie 氏は現在 IAML の会長なので多忙のため、当日は実際の編集責任者ブラゼコヴィッチ Zdravko Blažeković 氏が迎えてくれた。ブラゼコヴィッチ氏は旧ユーゴスラヴィア出身で、マッケンジー氏の就任時点から片腕として活動している。おふたりとは、筆者が 20 年以上も前に日本支部の事務局長となった頃からの顔なじみでもある。

その後、国際本部近くのレストランでブラゼコヴィッチ氏、アジア地区担当者ブルーム David Bloom 氏、藤沢さん、樋口先生と一緒にランチを食べながらのミーティング。お互いに忌憚のない意見交換などをしながら、充実した時間を過ごすことができた。ランチの後、藤沢さんの案内で本部近くのオクスフォード出版の支店や市立博物館を訪れた。

夜は、RILM 国際本部主催によるレセプションで、船を一隻借り切ってマンハッタン島付近のクルーズ（サークルライン）。二度の往復でニューヨークの夕暮れから美しい夜景、とくに自由の女神像を昼の光とライトアップの 2 回も見ることができたのはラッキーだった。



RILM 国際本部スタッフ  
マンハッタン・クルージング船上にて

途中で RILM 国際本部の事務局メンバーは集まれというアナウンスがあったと思ったら、なんと集合写真の撮影。これは、今年の本部からのクリスマスカードに使われていた！

船では旧知の RILM 各国支部の方たちとの出会いもあった。そのひとりニュージーランドの元支部長で国立図書館長フラリー Roger Flury 氏は、10 年以上も前のフランス（パリ）での国際大会の時に夜の親睦会で筆者が折った千羽鶴を今でも PC のそばに置いていと話してくれた。

6月23日(火)。RILMの公開セッション(14:00-15:30)。『国際音楽文献目録』の編集状況、各国支部の活動報告など。ここでは毎年、各国支部の文献送付数の一覧リストが配布されるので勤務評定をされている気分。その後、国際音楽学会の音楽学とデジタル化に関するセッションで、フランス・ルネサンスのシャンソン、ジェズアルドのオンラインなど興味深いプロジェクトを傾聴。夜は、ジュリアード音楽院コレクションによる演奏会後、図書館でレセプション。この時も、RILM ベルギー支部でブリュセル音楽院図書館のエックルー Johan Eckeloo 氏、音楽画像学研究者ジェトロー Florence Gétreau 氏に会うことができた。

6月24日(水)。午前中は、国際音楽学会東アジア部門(11:00-12:30)。樋口隆一先生の司会により、上海と台湾の方々報告。とくに台

湾の方は、RILM 台湾支部の活動をなさっており、その状況(英語への翻訳、人件費などの経済的問題と苦境)は日本支部の抱える問題と同じであった。

午後は恒例の遠足。多数の選択肢のなかから筆者はメトロポリタン美術館を選んだ。現地では、バロック絵画と楽器展示を解説つきで案内してくれた。その後、コロンビア図書館でのレセプションへ。貴重楽譜の展示とともに美味しい料理が並んでいた。

6月25日(木)。RILM 実務担当者によるミーティング(11:00-12:30)と RILM 創設者ブルック氏を偲ぶセッション。毎回の国際会議では、RILM 各国支部の実務担当者だけが集まるセッションがある。今回の出席者は 32 名。ひとりずつ自己紹介と状況や問題点などを報告、本部からも新しい編集方針の説明が行なわれた。日本支部(筆者)からは、英語への翻訳とそれに伴う経費の問題、そして目録のウェブ検索の試験運用の開始を報告した。終了後、RILM 国際本部から関係者にサンドイッチや果物のランチが提供された。その後、個人的に興味のあったモーガン博物館を訪問。国際本部の藤沢さんが現地まで同道してくださったので、迷わないですんだ。

午後には、RILM や RiDIM などの創設者であるブルック氏を偲んだセッションがあった。ブルック氏は 18 世紀フランス音楽の研究者でもあり、フランス語が堪能であった。そのため筆者が RILM 日本支部の事務局長として初参加した時など、とまどう筆者に特別な配慮をしてくださり、その後 10 年以上も連続して IAML に参加するきっかけを作ってくくださったことを今でも感謝している。このセッションでは、マッケンジー氏の他にコーエン Robert Cohen、マシップ Cathrine Massip、アトラス Allan Atlas の各氏が思い出を語るとともに、ありし日のブルック氏の写真や書斎もスクリーンに映し出



された。また会場には、ブルック夫人もいらしていた。

夜は珍しく会議関係のものがなかったので、宿舎の大学寮からジュリアード音楽院へ通う時に横切るリンカーン・センター広場にあるメトロポリタン歌劇場でバレエ「白鳥の湖」を鑑賞(残念ながらオペラ上演はない時期だった)。

6月26日(金)。音楽図像学(9:00-12:30)と名誉会員授与式、そしてフェアウェルディナー。筆者は、これまでもブルック氏やRILM関係者の多い図像学関係には毎回出席してきた。今年は、ファブリス Dinko Fabris 氏の司会により、RILM 国際本部のブラゼコヴィッチ氏、フランスのジェットロー氏、そのほか4名の発表があった。ジェットロー氏は、筆者の留学時代にパリ音楽院の楽器博物館で助手をなさっていた頃からの知り合いである(筆者は博物館での楽器学の講義に毎週出席していた)。

閉会式では、マシップ氏の IAML 名誉会員と国際音楽学会名誉会員の授与式があった。この両方の称号をもつ女性は、史上初という快挙だそうである。マシップ氏は、前フランス国立図書館音楽部門部長、RILM フランス支部長、IAML 会長、国際音楽学会副会長をつとめた。また、彼女は筆者の留学時代のゼミの先輩であり、長年の友人でもある。17世紀フランス音楽を研究していることから、いつもゼミが終わると一緒に国立図書館まで同道し、いろいろな話をしてきた。また2013年にフランスのロワイヨモン修道院で開催された国際研究会議では、私の発表(「徳川頼貞と南葵音楽文庫」)の司会者として、いろいろ助けていただいた。

すべての会議が終わり、夜は恒例のフェアウェルディナー。バスで1時間近くを移動してのパーティーは、ジャズバンドなどの演奏もあり、途中では会長のバーバラ夫妻やマシップ氏が率先して踊り出すなど、楽しい雰囲気でも会議関係のイベントは終了した。(せきね としこ)

## IAML / IMS 2015 New York で 思ったこと

藤堂 雍子

The Juilliard School (以下ジュリアード)は、舞台芸術の中心といえるリンカーン・センターに隣接していて、66番街の歩道橋一本で、オペラ劇場やコンサート・ホールと校舎や学生・職員寮を縦横に行き来できる位置に在り、プロ養成のための便宜と安全が最大限配慮されている。会議が始まる前夜のオープニング・セレモニー前に学生寮に入ることができた。これまで IAML 会議で泊まったことのある大学寮の中でも、かなりシンプルなものだったが、部屋からハドソン川と夕日が望めた。会議初日6月22日(月)の夜に50周年を迎えた RILM 主催で、ハドソン流域を延々クルージングしたのだが、これは新入生も経験する年中行事なのだそう。図書館は、校舎の中心最上階にあり、エントランス周辺で、大作曲家に加え、ジュリアード所縁の作曲家たちの自筆譜が展示ケースに陳列され、「威容」を誇っていた。木製の書棚や閲覧机で2フロアを占有しているところは、パンタン門駅に近い(以前は生鮮市場であった Cite de la Musique の一角)パリ音楽院のメディアテークに共通する。火曜夕方、学内ホールでのコンサート終了後に、閉館した閲覧室でレセプションがあった。

その閲覧室で、岩住励 Ray Iwazumi 氏に出会った。シアトル生まれ、鈴木メソッドでヴァイオリンを始め、ジュリアードのプレスクールを経て、名ヴァイオリン教師 D. ディレイ女史(学内報最新号で Legacy と尊称されている。2002年85才で没)に師事し、この図書館で所有する E. イザイの晩年の作 op.27(それぞれ稀代の奏者に献呈された6つの無伴奏ソナタ)の

自筆譜を専ら研究対象として博士号を取得した。今はジュリアードのファカルティとして演奏と教育活動に勤しんでおられる。当日のコンサートで、その 2 番のソナタを演奏、25 日(木)の「ベルギーと米国の間にある音楽アーカイヴ」と称するセッションで「イザイに関するニューヨークとベルギーのリソース」と題し、ジュリアードとベルギー王立図書館や、ブリュッセル音楽院、リエージュ(イザイの生地)に在る自筆譜を踏まえた研究成果を発表。先年 MLA 機関誌 *Notes* (v.67-1, Sep. 2010) に、また日本の弦楽器専門誌『ストリングス』(2008 年 9 月から 2012 年 11 月まで、以後同誌廃刊となり続行できなくなったのだが)において掲載、演奏者ならではの周到な調査・分析・解題を 4 年余り連載している。岩住氏は、日本での教育は音楽も含めまったく受けていない。コンクールにも興味はないそうだが、最近日本でも演奏活動を続けている。IAML 会議直後の 7 月 4 日にも、渋谷代官山で G. フォーレ作品中心のリサイタルを催し、イザイのヴィルトゥオジテとは別の柔らかで豊かな音色も披露。岩住氏のイザイ演奏は、作品の多様性を、研究で裏付けることによって得た力があり一聴に値する(今回の発表は、*La revue musicale belge* に掲載予定。なおジュリアード所蔵自筆譜は HP で公開されている<sup>1)</sup>。

IMS と合同で開催のニューヨーク会議は、「デジタル時代の音楽研究」と銘打たれ、多彩なセッションが並んだ。セッションの個々を解説するに足る字数を埋める違はない。ただ日本の音楽図書館は、このままでは、進展するデジタル目録環境に何歩も置いていかれかねないだろうことを感じた。欧米の音楽図書館にとっては、国単位の、あるいは種類図書館のコンソーシアムもあり、国際間でのネットワーク上で、一つの OPAC を共有することも増え、リソースシェアの世界は日常的に拡がっている。これはただた

だスタンダードに積み重ねたデータベースがあるからできることだ。翻って日本には NACSIS (大学図書館所在目録)もあるが、器を提供するだけで、進展するデジタル化に沿って目録の構造を対応させるよう積極的な対応はしてこなかった。とりわけ音楽固有の資料(楽譜や視聴覚資料)において、文献著作物と資料の在り方が異質であることを、依然として気づこうとしていない。これは重ねて声を大にして云わなければならないだろう。すなわち、「著作(音楽作品)」と「出版物」としての楽譜が 1:1 に対応しているわけではなく、多重な書誌構造を有するのである。また、同じ作品の楽譜でも、総譜、演奏用のパート譜、練習用に使うピアノヴォーカルや、コンデンススコア、ポケットスコアなど「形態」が多様であること、つまり「音楽」は演奏されることが前提の資料だから、その用途に沿って使う資料も異ならざるを得ないのだが、目録化する器がそのようにできていない。出版楽譜も古典名曲であればあるほど、多種多様で、演奏上必須の校訂版も多く存在する。また聴覚資料なら再生機器の異なる SP、LP、CD、MD などがあり、視聴覚資料では VHS、LD、DVD、等々再生方式も一様ではない。著作(音楽作品)そのものには、作曲者だけでなく、テキスト作者、楽譜校訂者、加えて複数の演奏者や演奏団体があり、アクセスポイントになりうる人名は枚挙に遑ない。また、それらの典拠を、アクセスに準じて典拠管理することも適宜必要なのだが、これまたひと筋縄ではない(最近オペラの登場人物単位で人名・役割典拠管理する動きもあるほどだ!)。再演を前提とする舞台芸術の資料の対象は、斯様な複重層的な構造を自ずと持っている。これは「文献」には皆無とは言えないまでも、程度としてそう多くはない。マルチの世界を駆使できる進展するデジタルメディアは、こうした要件を記録し、取り出す道具として、なるほど相応しい。アクセス側の需要に沿って目

録という器も仕組みが進展していくことが道理なのだろう。しかしNACSISは、依然として文献用の器のまま、限られた範囲の枠組しか設けていない。人名典拠ファイルもLC(米国議会図書館)典拠に依拠したままで、各加盟団体独自のOPAC上での対応に委ねられている状態であり、LC典拠に日本から新たな典拠を加えることもほとんどなされていない。ただぶら下がって恩恵だけを得ているのである。

メディアの進展に伴った新たな目録規則RDA(Resource Description and Access. 英米目録規則第2版<AACR2>の後継)は、度々典拠型の更改がある段階とのこと、体力の弱い(財政規模が脆弱な)国内の個々の単科音大図書館がそれぞれで典拠型更改を率先して実施することに足が鈍ってしまうのが現実なのであろう。唯一、日本でRDAに忠実に音楽資料の目録を構築し、受注し、典拠ファイルを維持しているといえる株式会社トッカータのチーフ・ライブラリアン鳥海恵司氏が日本近代音楽館や、公共図書館の目録を支えて対応していることは、IAML目録委員会のメンバーにも伝えている。他方、IFLAのUNIMARC(機械可読目録 RDAの入力枠組みUNIMARCは、目録法が変われば改訂される)常設委員会(PUC)は、現在ポルトガル、米、伊、露、仏、西、中国で構成されているが、FRBR(Functional Requirements for Bibliographic Records = 書誌レコードの機能要件)への取り組みに熱心なのは、上記とほぼ重なり(米、カナダ、仏、ポルトガル、西など)、フランスは、DOREMUSなるシステムの進捗を来年の委員会で報告する予定。FRBRの適用は、ドイツのデトモルト宮廷劇場の事例で報告されているように、劇場や、ミュージアムなどの史資料の目録化にも適用されており、舞台芸術全体に資することが意図されていて、RISMもこのプロジェクトに関与している<sup>2)</sup>。

昭和音楽大学の金井喜一郎氏が *Fontes* 最新

号(62-2)や、日本図書館情報学会誌上で、トッカータ・マークを調査対象とし、試論を展開しようとしているが<sup>3) 4) 5)</sup>、日本の音楽資料目録が、スタンダードな立場で典拠ファイルを共有するとか、OPAC上でFRBRを実装するなど、一步でも国際水準に歩み寄っていけないものだろうか、と久しく思っている。平たく云うなら、各音楽図書館の蝸壺現象の打破を目指すことに目を向けてほしい。MLAJやIAML存続の意義や目的はそこにあるのだから。日本の音楽資料が置かれている現実とメディア関連国際会議や人文科学分野で目指している世界とのジレンマはむしろ拡大してしまっていると感じる。また、米国東部やカナダから始まった(マッギル大学藤永一郎氏も含む)Music Encoding Initiative(MEI)<sup>6)</sup>は、音楽史や人文科学分野の研究者にとっても、関心ある領域のはずであらう。

註

1) <http://www.juilliard.edu/student-life/library-archives/juilliard-manuscript-collection>

2) <http://www.hoftheater-detmold.de>

3) Kanai, Kiichiro. "Manually identifying the entities of work and expression based on Music MARC data: towards automatic identification for FRBRizing OPACs" *Fontes Artis Musicae*, vol. 62 no. 2 (April-June 2015), pp. 118-128

4) 金井喜一郎「音楽資料検索要求とメタデーター音楽資料の特特徴からFRBRの適用まで一」『日本図書館情報学会誌』vol. 61, no.1 (2015), pp.18-28 (文献展望)

5) 金井喜一郎「音楽資料MARCを対象とした著作および表現形の機械的同定に関する基礎検討: 各実体の固定キー作成方法を探る」『日本図書館情報学会誌』vol 61, no. 3 (2015), pp.168-180

6) Music Encoding Initiative は、<http://www.iaml.info/congresses/2015-iamlims-new-york> で多数の発表資料が散見される。

(とうとう やすこ)



## 事務局だより



## IAML 会長、副会長選挙 一 候補者推薦を受付中

本年は IAML 本部の会長、副会長選挙の年にあたる。2014 年に会長職の円滑な遂行のために規約が改定されており、今回が改定後最初の選挙。従来、会長 President は、副会長 Vice Presidents (4 名) とともに 3 年ごとに改選されていたが (再選可)、改定により任期 6 年となり、任期中 3 段階で会長職を務める (President-Elect 1 年、President 3 年、Past President 2 年)。したがって、3 年ごとの選挙では常に「President-Elect」が新たに選出されることになり、会長職の再選はない。副会長の任期は従来通り。

現在、候補者推薦 (自薦を含む) を受付中である。推薦方法は候補者の同意書を添えて 3 月 1 日までに本部 HP より事務局長宛送信する ([www.iaml.info](http://www.iaml.info))。地域の多様性を反映させた活発な活動を推進するためにも各支部からの積極的な推薦が望まれている。以後の日程は、4 月 1 日に候補者発表、5 月投票 (電子投票。郵便投票も可)、6 月に選挙結果が発表される。

支部では 5 月の投票に向けて会員のメールアドレスの確認作業中である。2013 年以降にアドレスを変更または新規に取得した方は、事務局長・長谷川まで御連絡ください。yumikoha@mountain.ocn.ne.jp

## ローマ国際大会および大会初参加者のための補助金

本年度の IAML 国際大会は、既報の通り、7 月 3 日 (日) より 8 日 (金) までローマで開催される。開催国イタリア支部を中心に準備が進められており、2 月 6 日、大会プログラムが発表された (<http://www.iaml.info/congresses/2016-rome> 参照)。参加申込要領および宿泊施設などの案内は近日中に発表される。

日本支部では、初めて国際大会に参加する個人会員 (図書館等職員並びに非常勤講師等の研究者) および団体会員の各機関所属メンバーに対し、補助金制度を設けており、現在ローマ大会に向けて募集中である。応募締切は 5 月 20 日。詳細は事務局長までメールにてお問合せください。yumikoha@mountain.ocn.ne.jp

## 国立国会図書館の日本人作曲家手稿譜コレクション

国立国会図書館は、2012 年に急逝された作曲家故林光氏の自筆譜を中心とする作品資料を受入れ、整理を進めてきたが、本年 3 月 1 日よりその一部を公開、利用に供することになった。公開にあたり、3 月 16 日 (水) 午後 2 時より国会図書館東京本館において「手稿譜コレクション公開に寄せてー林光レクチャー・コンサート」が開催される。同館による報告「手稿譜及びその関連資料の提供開始について」、林淑姫講演「音楽資料と手稿譜コレクション」に続いて、池田逸子解説、佐藤紀雄ほか演奏により、「十二月 (じゅうにつき) の歌」などの林光作品が上演される。入場無料 (定員 80 名)。希望者は事前に申込みこと。詳細は国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20160316concert.html>) 参照。

## 日本近代音楽館名称変更と新 OPAC

明治学院大学図書館附属日本近代音楽館は、2015 年 12 月 10 日付で、名称を「明治学院大学図書館附属遠山一行記念日本近代音楽館」と改めた。また同日付で新 OPAC 暫定版を館内公開、年度内にウェブ公開の予定である。

## 会員の異動

入会 鳥海恵司氏 宮崎晴代氏 久保絵里麻氏  
アカデミア・ミュージック株式会社  
株式会社トッカータ  
退会 天野裕介氏 関根和江氏

## 会費納入のお願い

会費未納の方は、至急御送金をお願い致します。会費納入のための書類一式は既にお届け致しております。お問合せは会計まで。yokogrp@gmail.com

Newsletter ー 国際音楽資料情報協会日本支部  
第 56 号

2016 年 2 月 10 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部  
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5  
東京音楽大学附属図書館内  
<http://www.iaml.jp>